

京都の『源氏物語』と紫式部

●予定コース:

近鉄高の原駅(9:27)―近鉄京都駅(10:04)―市バス京都駅―府立医大病院前―廬山寺(紫式部邸宅跡)―中川―京都御苑(土御門殿跡・枇杷殿跡)(昼食)―土御門通―一条戻り橋―清明神社―西陣織会館―京都考古資料館―首途八幡宮(桃園宮邸跡)―櫛谷七野神社(賀茂斎院跡)―紫式部・小野篁の墓所―雲林院―市バス―京都駅―近鉄京都駅―高の原駅(解散)
(約5km・午後5時30分ごろ解散予定)

●廬山寺(紫式部邸宅跡)

廬山寺は比叡山天台18世座主元三大師良源(慈恵大師)によって平安時代中期の天慶年中(938～947)に船岡山の南に創建されました。鎌倉時代の寛元元年(1243)に法然の弟子である覚瑜が船岡山の南麓に再興、中国の廬山にならって廬山天台講寺と号しました。室町時代に応仁の乱で焼失した後、元亀3年(1571)、織田信長の比叡山焼き討ちは正親町(おおぎまち)天皇の女房奉書により免れたが、豊臣秀吉の寺町建設によって安土桃山時代の天正年間(1573～1593)に現在地に移った。度々の火災のため、現在の堂宇は江戸時代後期の寛政6年(1794)の再建になるものです。

平安時代、廬山寺のある辺りは平安京の一番東の通り、東京極大路と賀茂川の堤に挟まれた田畑の広がる眺望のよい地でした。この地に紫式部の曾祖父にあたる藤原兼輔(877～933)が広大な邸宅を築きました。兼輔は三十六歌仙に数えられ、第60代・醍醐天皇時代(在位897～930)の歌壇を代表する歌人で『兼輔集』という家集を残した風雅の貴族でした。官位も従三位権中納言、賀茂川堤の邸宅の中納言ということで、堤中納言と呼ばれ、紀貫之、凡河内躬恒らの有名歌人や文化人が四季折々の花にことよせて、その邸宅を訪ねています。

紫式部の父、藤原為時は、幼くして母を亡くした紫式部やその姉弟を引き取って、祖父のこの邸宅に住んだと考えられています。父、藤原為時も漢詩人として活躍しただけでなく、勅撰和歌集の歌人でもありました。紫式部の家系には父方母方ともに歌人として名を勅撰和歌集に残した者が多く、彼女は文学的環境に恵まれていたといえます。

「見どころもなき古里の木立を見るにも、むつかしう思ひ紊(みだ)れて、
年ごろつれづれに眺め明かし暮らしつつ、・・・」 『紫式部日記』

などと紫式部は中川の邸宅のことを『紫式部日記』に書いていますが、紫式部にとっては思い出に満ちた古里であり、『源氏物語』も主にここで執筆されました。

紫式部(生没年不詳)は、この邸宅で育ち、長徳4年(998)頃、親子ほども年の差がある山城守・藤原宣孝と結婚し、一人娘の賢子(大式三位)を産み、長元4年

(1031)59歳ほどで死去したといわれています。

境内には、紫式部と大弐三位の歌碑があります。

「めぐりあひて 見しやそれと もわかぬ間に 雲がくれにし 夜半の月かな」
紫式部

「有馬山 ゐなの笹原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする」
大弐三位

当日「源氏物語54帖を彩る華麗な屏風展」(拝観料800円)を開催されています。

●慶光天皇廬山寺陵

閑院宮典仁(すけひと)親王、[享保18年(1733)～寛政6年(1794)]は、江戸時代中期の宮家当主で皇族です。

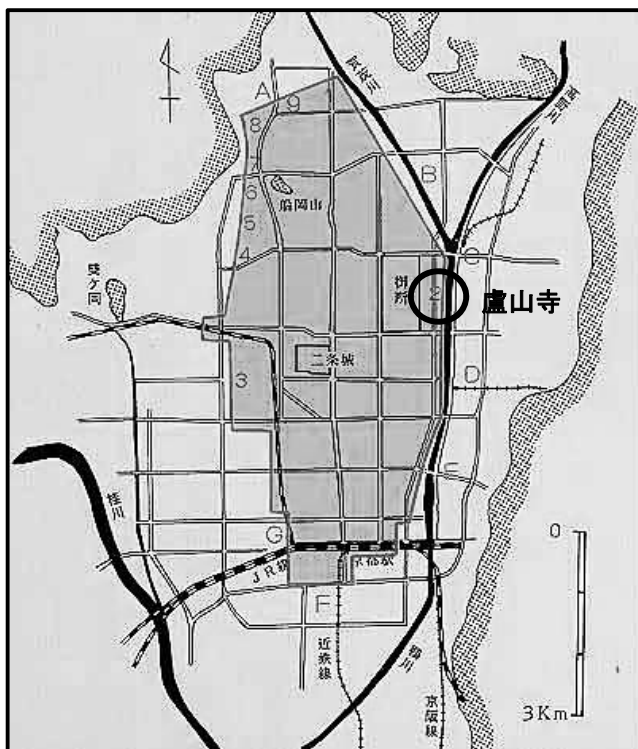
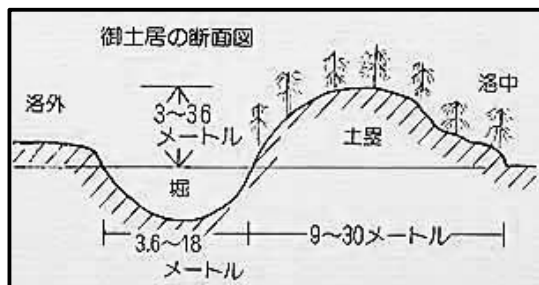
第119代光格天皇の父で、和歌の名手で能書家でありました。

明治17年(1884)になり、明治天皇の高祖父(4親等の直系親族、祖父母の祖父母、ひいひいおじいさん)にあたるという事で「慶光天皇」の諡号と「太上天皇」の尊号が贈られたために墓所は「陵」を名乗っています。

●御土居(おどい)

御土居は豊臣秀吉によって作られた京都を囲む土塁である。外側の堀とあわせて御土居堀とも呼ばれる。聚楽第、寺町、天正の地割とともに秀吉による京都改造事業の一つである。一部が京都市内に現存し、史跡に指定されています。御土居の内部を洛中、外部を洛外と呼ばれた。

鴨川の西に沿っており、その堤防としての役割を持っていた。御土居が北へ長く延びているのは、この地域で鴨川が氾濫すると京都市街地へ水が流入してしまうためである。



◆中川

中河とも記します。寺町通に沿って北から南に流れる小川でしたが、今は暗渠になって見ることは出来ません。もとは賀茂川の上流から水を引き、市の北郊の田野をうるおす灌漑用水であって、平安京造営に際しては、中川を以て東京極大路(寺町通)の外郭とされましたから、京極川とも称しました。中川といわれたのは、藤原道長の京極殿と、道長が奈良の東大寺に横して建立した法成寺との間を流れていたことから、名づけられた名だといわれています。もしこの説が正しいとすれば、この川が「中川」と人々にいわれるようになった時代は、紫式部にとっては、現代の社会でのことということになります。

そうすると、『花散里』の巻に出てくる「しのびて、中川のほど、おはし過ぐるに」とある中川も、『帚木』の巻に出てきた、光源氏が空蟬の女に逢う「中川のわたりなる家」とある中川も、同じ川を指しているだろうから、当時の読者としてはずいぶんなまなましい、現代のニュース的な刺激があったのではなかったかと思われまます。そして、紫式部がここで執筆したという事実と物語の舞台が交錯します。

★第2帖『帚木(ははきぎ)』(源氏17歳夏)

「雨夜の品定め」の翌日、光源氏は宮中を退出すると久しぶりに左大臣家に正妻葵の上を訪ねましたが、この夜は宮中から左大臣家の方角が方塞がり、方違えしなければならなくなります。方塞がりとは陰陽道で中つ神という神のいる方角に向かうことを避ける信仰です。

源氏は急遽、左大臣家の家来筋である紀伊守の中川のほとりにある邸に方違えをします。その紀伊守の邸にたまたま空蟬が来ていました。

空蟬は紀伊守の父の伊予介という老受領の後妻です。紀伊守邸に着いた源氏は、「のどやかにながめたまひて かの中の品にとり出でて言ひし、この並ならむかしと思しいづ」(源氏の君はゆったりとあたりをごらんになって、あのひとたちが中の品として取り出して言ったのは、この程度の家のことだろうなど「品定め」の話題を思い起こし、その夜、空蟬に忍び契りをかわしました。

★第11帖『花散里』(源氏25歳5月)

「何ばかりの御装なく、うちやつして、御前などもなく、忍びて、中川の程おはし過ぐるに、ささやかなる家の、木立などよしばめるに、よくなる琴をあづまに調べてかき合はせ、賑はしく弾きなすなり」

[源氏はそのころ煩悶の日々を送っていましたが、そんな日々の間隙に、麗景殿(れいけいでん、弘徽殿について格式の高い殿舎)の女御(桐壺帝の女御)と

妹の三君(花散里)の邸のある中川のあたりに出かけました。途中、植え込みなどが風情ありげにしげっている奥から、吾妻琴の調子にしたよく鳴る琴の音が聞こえてきます。]

なんとなくなつかしい風情に「かつて一度、たずねたことがある」と思い当たり、惟光(これみつ、光源氏の家来)にたずねさせますが、源氏の今の境遇に答えはつれないものでした。

●梨木神社

旧社格は別格官幣社。

久邇宮朝彦親王の令旨により、三条家の邸宅跡に三條實萬(さねつむ)を祀るための社殿を造営し、明治18年(1885)、地名からとった梨木神社の社号と別格官幣社の列格を受けて創建した。その後大正4年(1915)、大正天皇即位を記念して、子の實美(さねとみ)を合祀した。

實萬(さねつむ)公は王政復古を唱えられ、明治維新の原動力となられた方です。實美(さねとみ)公は右大臣、太政大臣、内大臣、内閣総理大臣兼任、貴族院議員などを歴任した明治政府の最高首脳人物の一人です。

京都の三名水(醒ヶ井、県井、染井)の1つとして知られる、「染井の井戸」から湧き出る名水です。

この井戸はかつて平安時代前期の第55代文徳天皇の皇后藤原明子の方の里御所の跡にあったもので、宮中御用の染所の水として染井の水が用いられたという由緒があります。

・上田秋成(雨月物語)の歌碑

「ふみよめば 絵を巻きみれば かにかくに 昔の人の しのぼるかな」

・湯川秀樹の歌碑

「千年の昔の園もかくやありし木の下かげに乱れさく萩」

●京都御苑

延暦13年(794)、桓武天皇により定められた平安京の内裏(皇居)は現在の京都御所から約2kmほど西にありました。しかし、度重なる内裏の焼失により、主に摂関家の邸宅を一時的に皇居とする里内裏が置かれるようになり、鎌倉時代の安貞元年(1227)の火災以後は、元の位置に内裏が再建されることはありませんでした。

現在の京都御所は、里内裏のひとつであった東洞院土御門殿に由来するもので鎌倉時代末期の元弘元年(1331)、光厳天皇がここで即位されて以来、御所とされたものです。

明德3年(1392)の南北朝合一によって名実ともに皇居に定まり、明治に至るまでの500年もの間、天皇の住まいでした。豊臣秀吉や徳川の時代になると、御所周辺には宮家や公家たちの屋敷が集められ、何度も大火に見舞われながらも明治初期の東京遷都まで、大小200もの屋敷がたちならぶ公家町が形成されていました。

明治2年(1869)明治天皇の東京遷幸が挙行され、これに伴って、多くの公家達も東京に移住したため、公家町は急速に荒廃していきました。

明治10年(1877)に京都に還幸された明治天皇は、その荒れ果てた様子に深く哀しまれ、京都府に御所保存・旧慣維持の御沙汰が下されました。

この御沙汰をうけ京都府では、直ちに「大内保存事業」を開始し、明治16年(1883)に完了しています。

●清和院御門

藤原良房の邸内の染殿第(そめどのだい)の南に創建された仏心院が由来。藤原良房の娘・明子(文徳天皇の後で清和天皇の生母)の御所であり、清和天皇は譲位後ここに移られて「清和院」と称されました。仏心院としての清和院は、1661年(皇紀2321)寛文元年 御所の大火により類焼。現在は京都市上京区七本松通一条上ルー観音町(京都御苑の西2km)にあります。

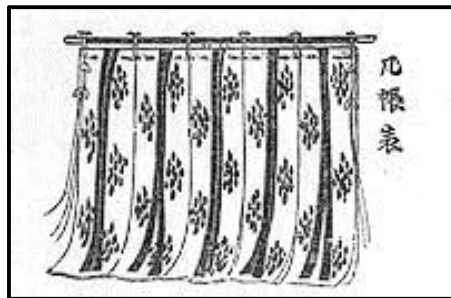
●土御門殿

土御門殿はもと源重信(宇多天皇の皇子である敦実親王の三男で宇多源氏の祖)の邸宅でしたが、兄雅信の娘倫子に伝えられ倫子と結婚した藤原道長が受け継ぎました。ここで第68代の後一条天皇(敦成(あつひら)親王)ら三代の天皇が誕生しました。

『紫式部日記』には、その敦成親王の五十日の祝いの日のことが書かれています。紫式部のいる几帳の所へ中納言藤原公任がやってきて『このわたりには若紫やさぶらふ』と言いましたが、光源氏にかかわりのありそうな人もみえていないのに紫の上がいるわけがないと思って黙っていたと書いています。

発掘調査が十分に行われていないので、どのような邸宅だったかはわかりませんが、平成14年の京都迎賓館の建設に伴い行われた調査では、清和院御門を入った地点で池の遺構が見つかっています。土御門殿の北端にも池があったようなので、北池も土御門殿の池を部分的に生かしているのかもしれない。

几帳(きちょう)



●枇杷殿跡

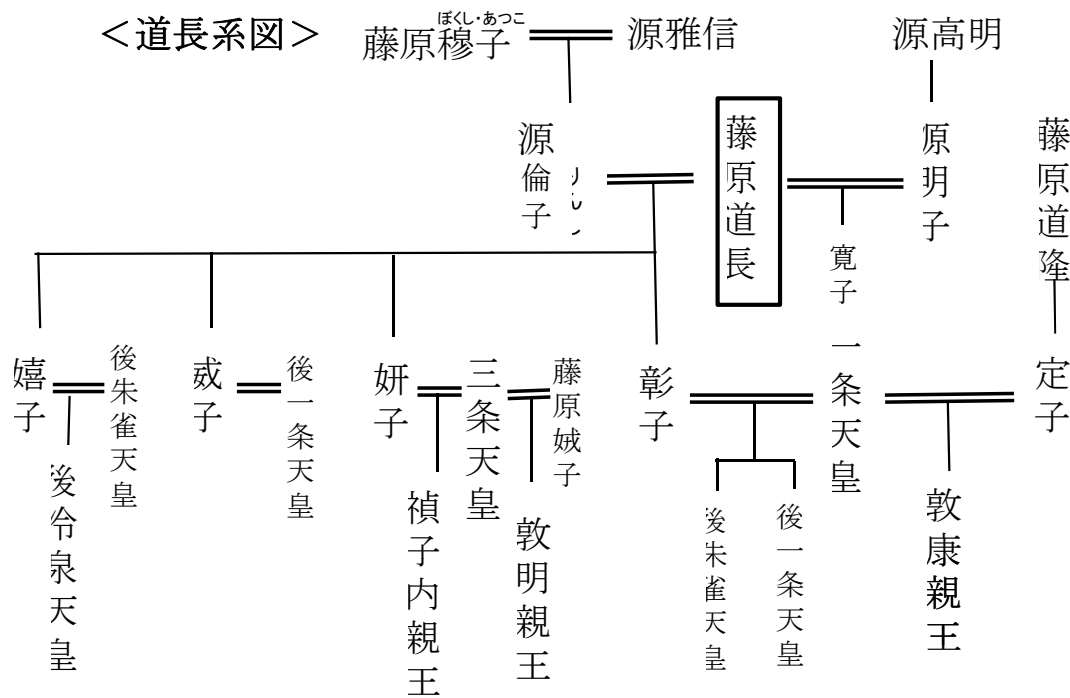
敦成(あつひら)親王に続けて敦良親王を年子で出産した中宮彰子は、一条院焼失のため天皇の里内裏となった枇杷殿に移りました。土御門殿から枇杷殿への入御と言っても目と鼻の先です。道長は一条天皇も皇子二人も自邸に取り込む形となって、有頂天だったのではないのでしょうか。

枇杷殿は平安時代の名邸として知られ、平安前期の権中納言藤原長良が営み、その子の関白基経(もつつね)、さらにその子の左大臣仲平(なかひら)へと伝えられ枇杷左大臣とよばれた。

紫式部の時代には、道長と娘妍子の邸宅として伝領、造営されていました。平安時代中期の寛弘2年(1005)の内裏焼失で、皇太子居貞親王(三条天皇)が御所として移り住み、寛弘6年に一条天皇の里内裏となったほか長和3年(1014)と翌長和4年の内裏焼亡でも、三条天皇の里内裏になっています。

●土御門通

寛弘5年11月17日(1008年12月17日)、一条天皇の中宮彰子は、実家の土御門殿での出産を終え、一条院内裏に戻ります。正装した紫式部や中宮、若宮に仕える大勢の貴族たちがたいまつを掲げ供をする様子『紫式部日記』に書かれています。土御門殿の西門から富小路を北に上がると、土御門大路に出ます。その大路を西に進み、猪隈小路を上がって、一条院の東北門から還御しています。中宮一行が通った土御門大路は、京都御苑の蛤御門を出た辺りの烏丸通から堀川通まで続く現在の土御門通に重なります。



●一条戻橋

一条戻橋は、一条通の堀川にかかる橋ですが、平安遷都以来、その位置が変わらないという点で重要視される橋です。今も一条大路のほぼ中央に位置していて、1200年以上も位置が変わっていません。

戻橋の名前の由来は、『拾遺往生伝』巻中や『撰集抄』巻6等に寄れば、平安中期の僧、浄蔵貴所が父の文章博士三善清行が亡くなったとき、紀州熊野から駆けつけ、この橋で父の葬列に出会い、父を一時蘇らせたという伝説によります。また、安倍晴明が戻橋の橋下に式神（陰陽師が使役する鬼神）を封じ込めていたとか、源頼光の家来渡辺綱が戻橋のたもとで、見目麗しい女子に化けた鬼女に出会い、一命を失いかけたことがあり、その鬼女の腕を切り落としたという伝説などが伝承されています。

桃山時代になると、この橋付近は罪人のさらし場となり、刑場への引き回しの通り道とされ、千利休も秀吉の命で切腹した首が晒された場所でもあります。

★第9帖『葵』(源氏221～22歳)

天皇が桐壺帝から朱雀帝にかわり、新しい賀茂の斎王が決まって、葵祭に先立ち賀茂川で禊ぎをする御禊(ごけい)が盛大に行なわれ、源氏が御禊の行列に奉仕するというので世間の評判になっていました。

葵の上も六条御息所もその見物に出かけましたが、一条大路で見物の場所取りを巡って従者同士が衝突し、御息所は自分の車を葵の上の女房車の奥に押しやられるという屈辱的な目にあいます。衆人環視のなかで辱められた御息所の恨みは深く、心身に不調をきたすようになりましたが、そのころから世間では御息所の生霊が、源氏の長男夕霧を身ごもった葵の上に取りついたと噂するようになりました。

その車争いをした場所が一条戻橋のあたりといわれています

一条大路は現代の一条通に当たりますが、かつての広さはありません。

斎宮の想定復元



斎王代禊(みそぎ)の儀



禊の儀は、1年おきに上賀茂神社と下鴨神社で交代に行われています。

◆齋宮と齋院

伊勢神宮の齋宮が天皇家の祖神に仕えるのに対し、賀茂神社の齋院は皇室の守護神に治世安泰を祈るために設けられたといわれています。

齋宮も齋院も天皇の名代として神に奉仕するのですから、『延喜式』をみると卜定される有資格者は未婚の内親王、ついで女王(親王の娘)と決まっていた。卜定された齋院は、まず賀茂の河原で御禊(みそぎ)をするために、数十人にのぼる物々しい行列に供奉されて車駕で河原に行き、身を清めることになっていました。

河原から内裏に戻ると、彼女はもう両親の膝許で甘えることは許されず、内裏の一隅に設けられた聖所(初齋院)に入って、以後足かけ三年にわたり、齋院としての神聖さを身にまとうべく厳しい潔斎の日を送ることになります。

そして三年。初齋院での厳しい準備期間を終えた齋院は、いよいよ本格的な齋院生活を送るべく、勅使大納言も派遣されている百名を越す人々に供奉され、紫野にある齋院御所(野宮)に送り出されます。紫野の野宮には齋院関係の事務一切を管轄する齋院司という役所が置かれ、長官以下、次官、判官等々の役人が配置されていました。

野宮の所在地は、角田文衛博士(大阪市立大学教授を経て平安博物館長)の調査によりますと、上京区大宮通の西、廬山寺通の北の地域、現在の社横町を中心とする一区画、櫛谷七野神社のあたりが賀茂齋院跡と言われています。

●清明神社

祭神安倍晴明(921～1005)は、天文暦学を極め天文陰陽博士として活躍し、朱雀帝から村上、冷泉、円融、花山、一条の六代の天皇の側近として仕えました。晴明が亡くなった後、一条天皇がその偉業を称え、晴明の屋敷跡に清明神社を創建。当時の社地は広大なものであったらしいですが 戦火や豊臣秀吉の都市整備などにより次第に縮小されました。

本殿北には清明井といわれる井戸があり、伝承によれば千利休が茶会においてこの井戸水を茶の湯として利用していたといわれ、秀吉もその茶を服したと伝えられています。清明神社の入口に千利休聚楽屋敷跡があります。

安土桃山時代の末期、
豊臣秀吉が建てた聚楽第

○は清明神社と千利休屋敷



●西陣織会館

西陣織の源流は、遠く古墳時代にまで求められます。5、6世紀頃、大陸からの渡来人である秦氏の一族が山城の国、つまり今の京都・太秦あたりに住みついて、養蚕と絹織物の技術を伝えました。

飛鳥時代や奈良時代を経て、やがて平安京への遷都が行われると、朝廷では絹織物技術を受け継ぐ工人(たくみ)たちを織部司(おりべのつかさ)という役所のもとに組織して、綾・錦などの高級織物を生産させました。いわば国営の織物業が営まれていたわけです。織物の工人たちは現在の京都市上京区上長者町あたりに集まって、織部町といわれる町をかたちづくっていました。

桓武天皇の平安遷都の大きな背後の力となったのも秦氏の経済力でした。平安王朝の宮廷服飾文化もこの伝統の上に花開いたものです。

室町時代の中頃、京都の街を舞台に東軍と西軍が争う応仁の乱が起こり、京都の町は荒廃し、職工たちは一時塚の町に疎開しましたが、乱が終わると再び京都に戻り、もとの場所にほど近い白雲村(上京区新町今出川上ル付近)や、戦乱時に西軍の本陣であった大宮今出川付近で織物業を再開しました。西陣織という名前は、西軍の本陣跡、つまり西陣という地名がその由来です。

●京都市考古資料館

建物は市登録文化財の旧西陣織物館。昭和54年(1979)に開館されました。京都市内で発掘された埋蔵文化財を中心に各時代の考古資料、平安時代の土器の変遷などが展示公開されています。

特別展「平清盛 院政と京の変革」(無料)が開催されています。

●桃園宮の跡・首途(かどで)八幡宮

平安時代末期、平治の乱(平治元年12月9日(1160)、院近臣らの対立により発生した政変)において義経の父、源義朝が平清盛に敗れたため、源義経は幼くして鞍馬寺に預けられました。平家隆盛の時代であり、源氏は京都を追われて地方へ散り、後に源義経も奥州藤原氏の庇護を受けるために奥州平泉へと下りました。

その時、商いで奥州藤原氏と縁のあった金売吉次が手助けをしたとされ、義経は都を発つにあたり、吉次の屋敷の神社があったこの地で旅の安全を祈願したと言われています。

鳥居の下には「源義経(牛若丸) 奥州へ旅立ちの地」との看板があります。

また、首途八幡宮のあたりに『源氏物語』の時代桃園親王の館がありました。

★第20帖『朝顔』(源氏32歳)

『朝顔』巻で語られる朝顔への恋は、源氏が17歳のころに歌を贈ったのが始まりです。朝顔は桐壺院の弟桃園式部卿の宮の姫君で、源氏にはいとこにあたります。

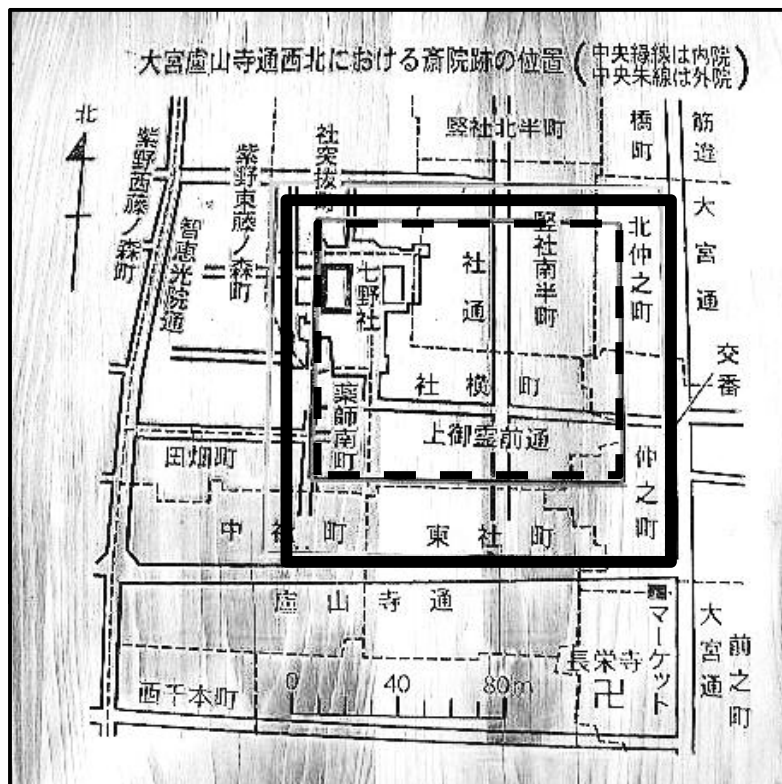
藤壺の死去と同じ頃、源氏の叔父である桃園式部卿宮が死去したので、その娘、朝顔は賀茂斎院を退いて邸にこもっていた。若い頃から朝顔に執着していた源氏は、朝顔と同居する叔母女五の宮の見舞いにかこつけ頻りに桃園邸を訪ね、紫の上を不安にさせる。朝顔も源氏に好意を抱いていたが、源氏と深い仲になれば、六条御息所と同じく不幸になろうと恐れて源氏を拒んだ。朝顔への思いを諦めた源氏は、雪の夜、紫の上をなぐさめつつ、これまでの女性のことを

話して過去を振り返る。その夜源氏の夢に藤壺があらわれ、罪が知れて苦しんでいると言って源氏を恨んだ。翌日、源氏は藤壺のために密かに供養を行い、来世では共に願った。

●櫟谷七野神社

平安時代から鎌倉時代にかけて賀茂社に奉仕する齋王が身を清めて住まわれた齋院のあった場所で、このあたりが紫野と呼ばれていたため、「紫野齋院」とも称されました。この齋院の敷地は、約150㎡占めていたそうです。

齋院に隣接して廬山寺があったが、応仁の乱(1467)後に荒廃してしまい、朝一番に行った寺町通広小路(上京区)へ移転し地名のみが残っている。



齋院の広さは外院(実線)で、約150m×約150m=22,500(6,670坪)
内院(点線)で、約120m×約120m=約14,400㎡(4,360坪)

●紫式部墓所・小野篁墓所

『河海抄』(室町時代初期に成立した源氏物語の注釈書)に「式部の墓所は雲林院白毫院の南に在り、小野篁の墓の西なり」と記されて以来、墓と伝えられています。

白毫院は応仁の乱で荒廃、天正年間(1573~1592)に墓の前にあった供養塔の十三重塔だけが千本閻魔堂に移され、今も千本通鞍馬口下ル西側に残されています。

篁の墓の隣に紫式部のものといわれる墓があるのは、『源氏物語』のような罪深い物語を描いた咎で地獄に落とされた紫式部を、篁が閻魔大王にとりなしたという伝説に基づくものです。

小野篁は遣隋使を務めた小野妹子の子孫で、父は小野岑守(みねもり)。孫に三蹟の一人小野道風がいる。平安時代前期の官人、学者、歌人です。

●雲林院

雲林院は天長年間(824～34)、淳和天皇が紫野に造営された離宮紫野院をのちに天台寺院に改め、僧正遍昭(平安時代前期の僧・歌人で六歌仙および三十六歌仙の一人)が住職となった古刹です。

千手観音を本尊とした本堂以下多くの堂舎が備えられていましたが、時代と共に新しい仏殿堂舎が建立され、様々な法会が催されました。

なかでも念仏寺の菩提講は、極楽往生へ導く法華經の説教会として、今日の彼岸会のように多くの人が参集しました。

鎌倉時代までは天台宗の官寺として栄え、菩提講・桜花・紅葉で有名でした。

雲林院は、『今昔物語集』、『大鏡』の舞台となり、また『古今和歌集』以下の歌集で歌の名所であった。在原業平が『伊勢物語』の筋を夢で語る謡曲『雲林院』にもなっています。

鎌倉時代に入って衰退したものの、正中元年(1324)に復興され、大徳寺付属の子院となった、応仁の乱(1467～1477)の兵火により廃絶してしまった。

現在の雲林院は、江戸時代中期の宝永4年(1707)にかつての寺名を踏襲し、大徳寺の塔頭(たちゅう)として建てられたものである。境内に本堂はなく、堂宇として再建された観音堂が残る。

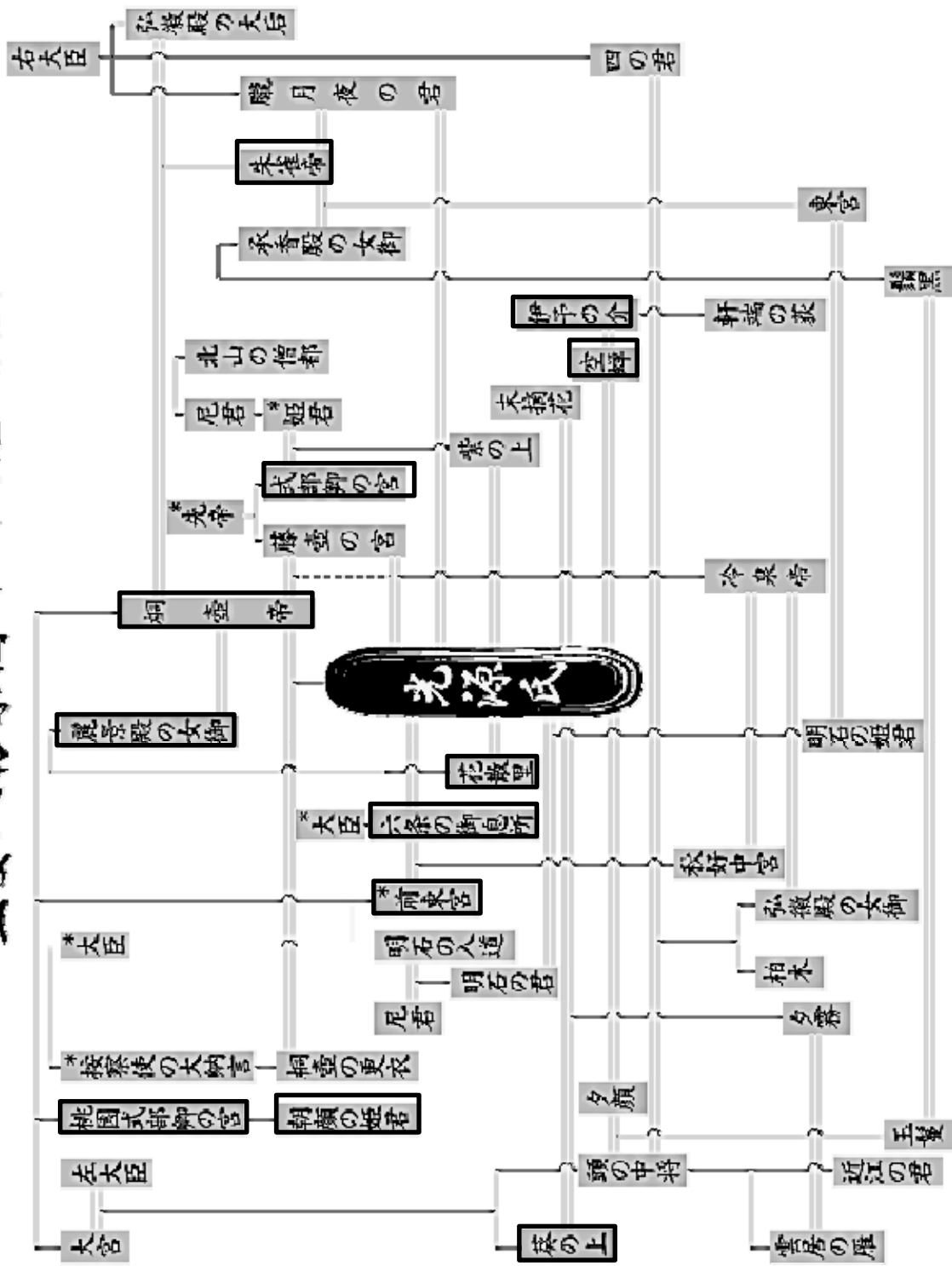
・僧正遍昭の『百人一首』歌碑

あまつかぜ 雲のかよひち 吹きとちよ をとめのすがた しばしとどめむ

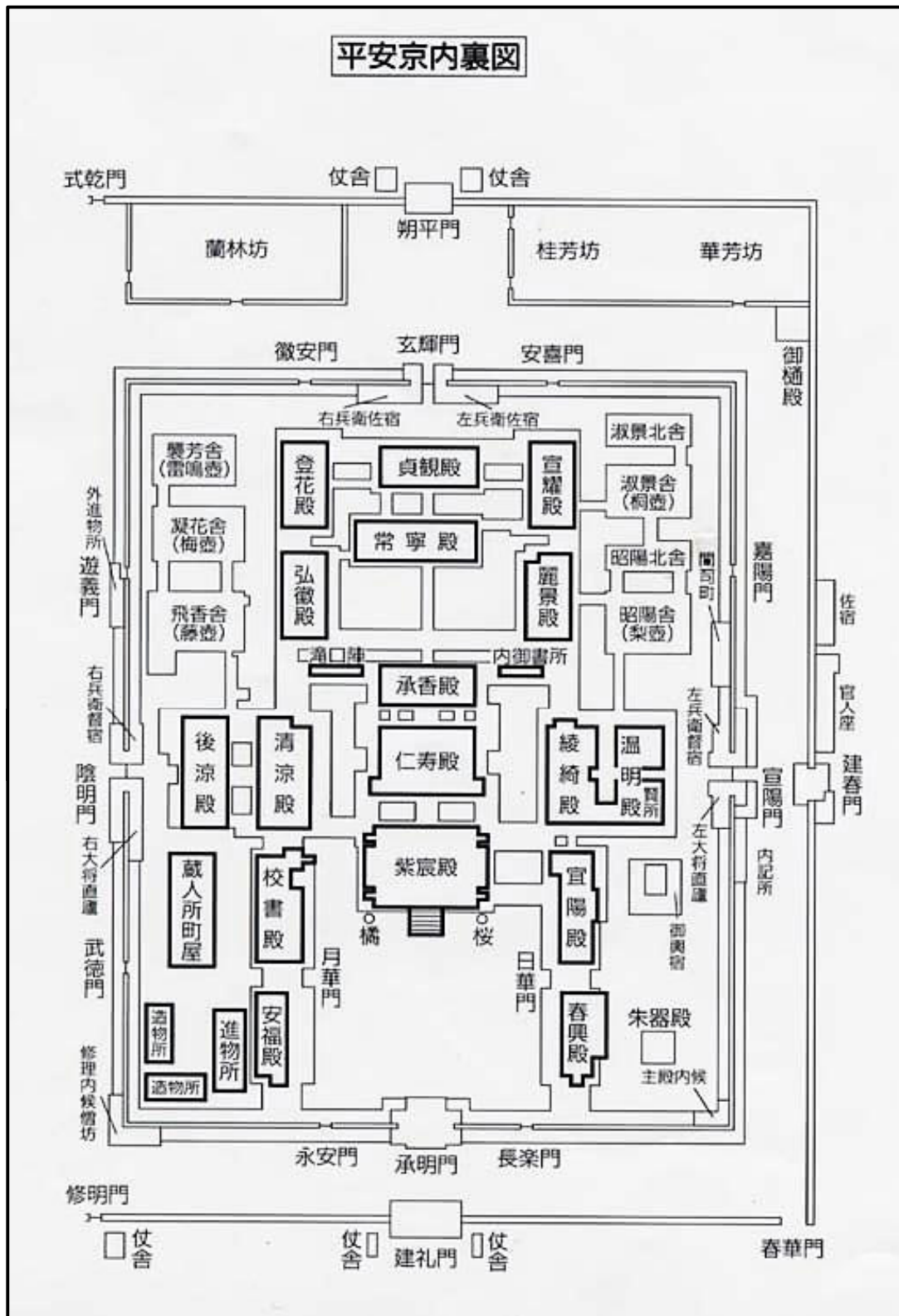
★第10帖『賢木(さかき)』(源氏23～25歳)

大将の君は、東宮をまことに恋しくお思いになるけれども、母宮のあきれるばかりにつれないお心のほどを、ときどきは宮ご自身に思い知らせてあげようとて、会いたい気持ちを押し押しお過ごしになるにつけて、人目に体裁悪いほど茫然として、わが身を持ってあますようになられるので、秋の野辺もごらんになりがてら、雲林院に参詣なされる。亡き母御息所の御兄上の律師が籠居しておられる僧坊で経文などを読み、お勤めしようとお思いになって2、3日ご滞在になられるが、心にしみることも多いのです。

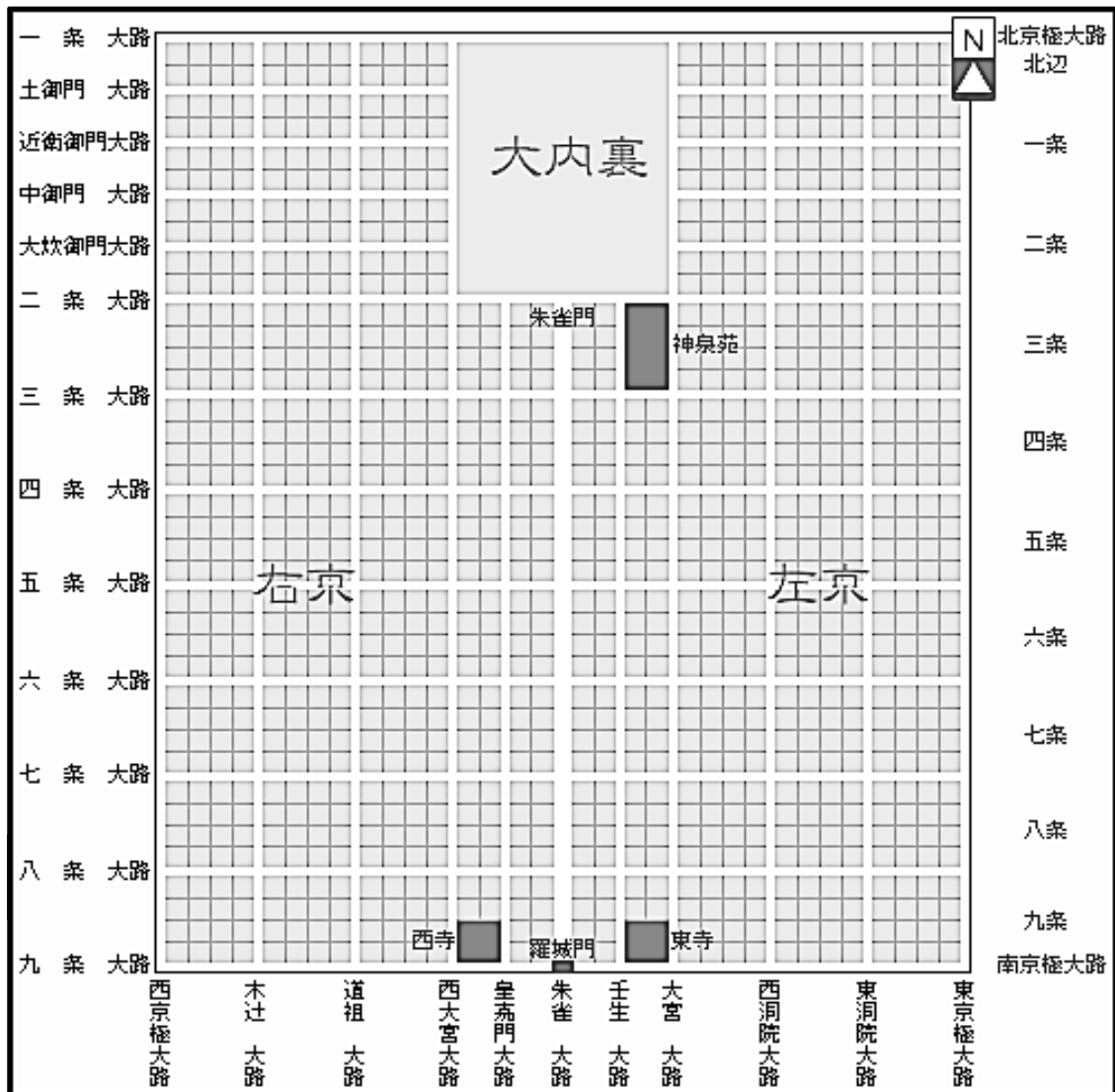
主要人物系図 第一部 桐壺～藤裏葉



平安京内裏図

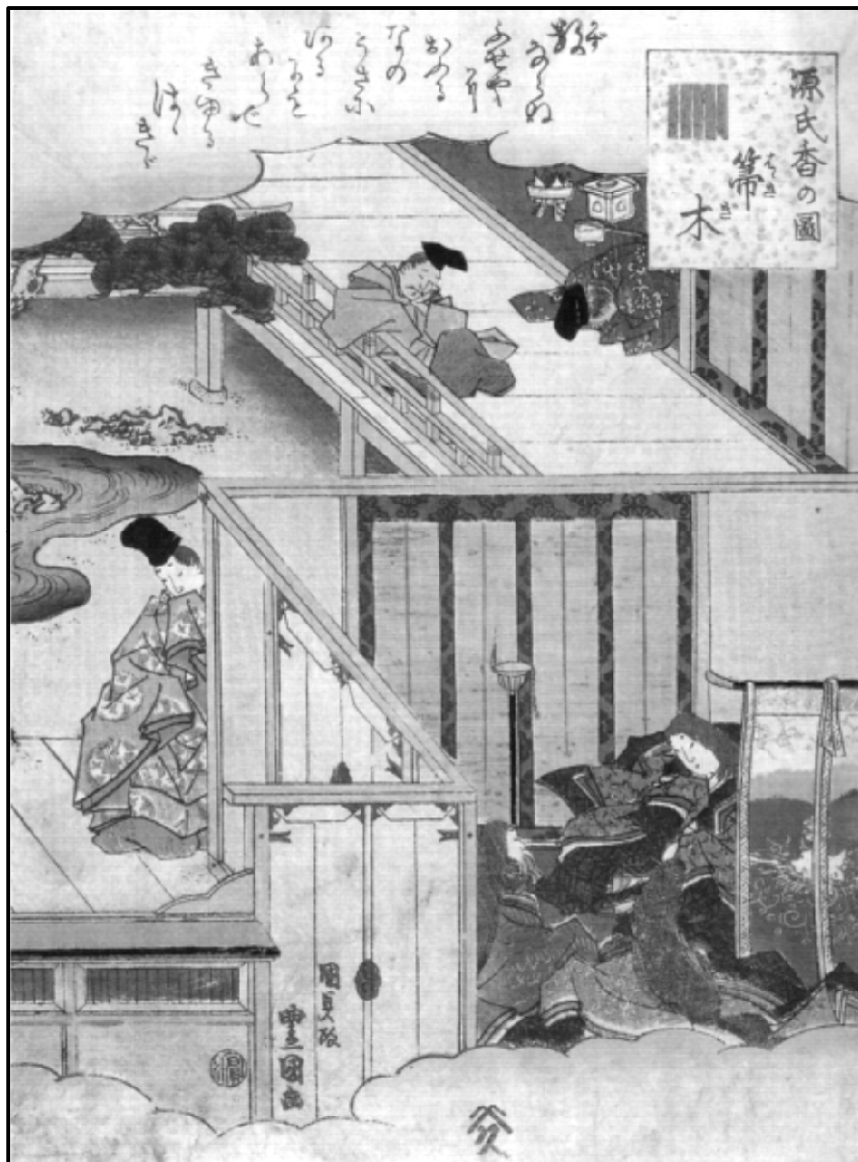


平安京図



●参考文献

- ・『歩く源氏物語』 瀬戸内寂聴 1994年 (株)講談社
- ・『源氏物語』 瀬戸内寂聴 1990年 (株)講談社
- ・『源氏物語の地理』 角田文衛・加納重文 1999年 (株)思文閣出版
- ・『錦絵で楽しむ源氏物語』 岩坪健編 (有)和泉書院
- ・『源氏物語の平安京』 加納重文 2011年 (株)青簡舎
- ・『京都紫式部のまちーその生涯と源氏物語』 坂井輝久 (株)淡交社
- ・『明解 源氏物語五十四帖』 池田弥三郎 平成20年 (株)淡交社
- ・『源氏物語を歩く』 京都新聞社編 昭和61年 光風社出版
- ・『源氏物語』 谷崎潤一郎訳 1992年 中央公論社



★第2帖『帚木(ははきぎ)』(源氏17歳夏)

数ならぬ ふせやにおふる なのうさに あるにもあらで きゆるははきぎ